

蔵田周忠と民俗学

— 1920～30年代における民家研究と民俗博物館との関わりをめぐって —

丸山 泰明

MARUYAMA Yasuaki

はじめに

蔵田周忠（1895～1966）は大正期から戦後にかけて活躍した建築家である。建築の設計のみならず、最新のヨーロッパの建築動向の紹介や建築批評といったジャーナリズム、東京高等工芸学校（現東京工業大学）や武蔵高等工科大学および戦後昇格した武蔵工業大学における教育、型而工房を主宰しての家具のデザインなど、その活動の幅はきわめて広い。蔵書や原稿・設計図などは没後武蔵工業大学に寄贈され、大学図書館に蔵田文庫が開設された。なお武蔵工業大学は2009年に東横学園女子短期大学と統合し新たに東京都市大学となっている。

近年では、1930年から31年にかけてのヨーロッパ留学時を挟んだ前後におけるモダンデザインの先駆者としての側面に光が当てられ再評価されている。2008年には松戸市文化ホールを会場として「結成80周年モダンデザインの先駆 型而工房展」が開催され、蔵田周忠らによる機能主義的でありながら日本の現状に合わせた量産品の家具の調査・研究・設計・製作・販売の試みが紹介された（森2008）。また2009年にゆまに書房から出版された「コレクション・モダン都市文化（第3期）のシリーズの一つである『デザインとバウハウス』には、1933年に上梓された『近代的角度』が復刻・収録されている（山野編2009）。

ところで、モダンデザインの先駆者として活動していた時期はまた、民家研究を行うなどの民俗学的な領域にも参画していた時期でもある。しかしながら、モダンデザインの観点から蔵田周忠を論じる際に民俗学的側面についてはほとんどふれられないことがない。他方、今日の民俗学界においても、重要な研究者として

学史の中に位置づけられているとは言いがたい。蔵田周忠は、日本民俗学会の学会誌である『民間伝承』に1950年から1952年にかけて27回連載した文章をまとめた『民家帖』（蔵田1955）をはじめとする、民俗学的な観点から民家を研究した人物として位置づけることができるが、その研究内容や視点・方法論についてはほとんど検討されてこなかった。

本稿では主に1920～30年代に焦点を合わせ、これまでの研究において看過されてきた民家研究と民俗博物館との関わりといった民俗学の側から、蔵田周忠について考えてみることにしたい。蔵田周忠は戦後も民家研究を行い学生とともに民家の調査を実施しているが、それらは戦前の延長線上にあり特に目立った深化を見せておらず、研究の特質は戦前期の活動にもっともよく現れ出ている。東京都市大学図書館蔵田文庫に所蔵されている資料を紹介しながら、壮年期における精力的な活動について検討を進めることにしよう。

本稿の構成は次のようになっている。まず「Ⅰ 蔵田周忠とその民家研究」において蔵田周忠の経歴をたどるとともに、民俗博物館の研究資料としての民家模型の製作に取り組んでいたことを紹介し、民家研究者としての特徴について考察することにしたい。次に、「Ⅱ 民家と博物館 — 民藝運動との対比から」では、民藝運動について蔵田周忠はどのように考えていたのかを考察することを通じて、蔵田の民家研究の特質と民俗博物館の位置づけについてより掘り下げる。そして「Ⅲ 『民藝博物館計画案』について — 皇紀二千六百年記念日本民族博物館本館の可能性の検討」において、東京都市大学図書館蔵田文庫に所蔵されている「民藝博物館計画案」を取り上げ、この建築の設計図が皇紀二千六百年記念日本民族博物館の本館の設

計図である可能性を検証する。

I 蔵田周忠とその民家研究

蔵田周忠は1895年に濱岡家の長男として山口県萩市に生まれた。後に伯父の蔵田家を継いでいる。上京して工手学校（現工学院大学）に学び、卒業後は三橋四郎建築事務所、曾禰中條建築事務所などの建築事務所に勤めるが、向学心から1920年に早稲田大学の選科生として学ぶ。修了後には、当時のヨーロッパの近代建築を日本に紹介する雑誌の編集や執筆にたずさわる旺盛な執筆活動を展開し、1924年には日本初の近代建築の通史である『近代建築思潮』を上梓している。また1922年の平和記念東京博覧会に個人の創造性を高らかに謳い上げた分離派建築会のメンバーとして作品を発表するが、やがて表現主義からバウハウスの機能主義的なデザインへと関心は移っていく。1930年から1931年にかけて渡欧し、バウハウスの創立者であるグロピウスのもとに滞在するなどして学んだ。帰国後に、新設された武蔵高等工科学学校の教授となり、戦後、武蔵工業大学に昇格したのちも学生たちに教え続けた。死去したのは大学退職後の1966年のことである（村松2005）（大川2009）。

蔵田周忠の民家への関心は、1920年に早稲田大学で選科生として学んだ際に今和次郎に師事したことによってはじまる。蔵田周忠が学んでいたとき、今和次郎は精力的に民家の調査を行っていた。1917年に柳田国男が主宰する白茅会に参加したことをきっかけとして民家研究に着手し、1919年からは農商務省の官僚である石黒忠篤に委嘱されて全国の民家の調査に取り組んでいる。その成果としてまとめられ1922年に出版されたのが『日本の民家』である。蔵田周忠は後年、学生時代に接した今和次郎の風貌について、コールテンの折襟の上着に同じズボン、ズック靴という出で立ちで、ゴールデンバットを吸うというよりもガチガチ噛むようにしてくわえながら片方の手を上着のポケットに入れていつも何かを考えるまなざしで歩く、「早稲田大学教授」から想像する風采からかけ離れた姿であったと親しみを込めて回想しており、「先生の書斎には参謀本部の地図や民家の写真が沢山のノート

と共に整理されてあるのを見せてもらつて、ずいぶん啓発されたものだつた」とも述べている（蔵田1934b）。戦後に出版した『民家帖』でも「若い頃から早大建築科の今和次郎先生は私の崇敬する恩師である。特に絵の好きな私は、今先生の名著『日本の民家』その他のご著書や雑誌に発表される民家のスケッチを深く尊敬し追随した」（蔵田1955：3）と記している。今和次郎との交遊は生涯つづいた。蔵田文庫には今和次郎からの私信がいくつか収蔵されているが、その中には早稲田大学退職後に庭の松の手入れにいそしんでいる隠居生活を詠んだ俳句が書き添えられた葉書もあり、お互いにずいぶんうちとけた間柄だったことを教えてくれる。

早稲田大学時代には、蔵田自身が民家研究において「いつもいっしょだった」（蔵田1955：2）と表現する友人である竹内芳太郎とも出会っている。ちなみに蔵田周忠が武蔵高等工科学学校の教授となったのは、竹内芳太郎の推薦によるものだった。デザインで特色のある学校をと考えてドイツへ留学中の蔵田周忠を独断で製図の選任者として加えることを提案し、あとから手紙で書き送ったのだった（竹内1978：493）。師である今和次郎と友人の竹内芳太郎はそれぞれがお互いに触発しあう研究仲間であり、3人の交遊は生涯変わることなく続いた（写真1）。



写真1 蔵田周忠（中央）と今和次郎（左端）、竹内芳太郎（右端）
（東京都市大学図書館蔵田文庫所蔵）

早稲田大学で学んだ後、建築家として設計やジャーナリズムの分野で活動しつつ、その傍らで民家研究に取り組んでいった。日本各地の民家を調査するとともに、1930年から翌年にかけての渡欧中にはドイツの民家についても調査し、1938年には熱河など中国大陸の民家についても調べている。このような、1920～

30年代における蔵田周忠の民家研究は、同時代における生活を芸術化し芸術を生活化していこうとした文化運動の中に位置づけることができるだろう。1927年に結成された民俗芸術の会にも今和次郎や竹内芳太郎とともに初期から加わっている。民俗芸術の会とは、雑誌『民俗芸術』を媒体とし、芸能や祭礼、民謡、語り物、造形美術といった「民」による表現について調査、研究、批評、創作を行う団体である。民俗芸術の会における活動として、蔵田周忠は民俗芸能や祭礼の様子を記録したスケッチを残している⁽¹⁾。

1933年に発足した民家研究会には、蔵田周忠は主要メンバーとして参加している。民家研究会は1933年11月17日に創立に関する打ち合わせが行われ、同年12月15日第1回例会が開催された。蔵田文庫には、打ち合わせの際のメモと思われる資料が所蔵されている(写真2)。このメモを見ると、人名が上下二段に分けてあげられている。下の段で名前があげられているのは藤田元春、石原憲治、大矢信雄、能勢〔能瀬一筆者補〕久一郎、今和次郎、竹内芳太郎、田辺泰、横山信、蔵田周忠、津田鑿である。上の段は指導や後見をおおぐ顧問格の人びとだろう。ブルーノ・タウトや佐藤功一、大熊喜邦、塚本靖、本野精吾といった建築家のほかに、民俗学の柳田国男や折口信夫、地理学の小田内通敏、農政官僚の石黒忠篤、日本画家の

平福百穂、初期民家研究会に会場を提供していた日本青年館の幹部である田澤義鋪や熊谷辰治郎の名前があり、民家を建築の分野に限るのではなく幅広く捉える研究会を構想していたことがうかがえる。また、民俗学や人類学・考古学専門書籍の出版社である岡書院から会誌を出版する構想があったらしく、四六倍、24頁、全部アート、9ポ(イント)、横組、目次esperant(エスペラント)とある。全部アート紙にすることは写真やスケッチを多数掲載することを想定しているということであり、凝ったつくりの雑誌の刊行をもくろんでいたと思われる。この出版構想は、建築関連雑誌の執筆や編集にたずさわっていた蔵田周忠によるものではないだろうか。ただし実際には会誌が発行されるようになったのは1936年からであり、それも折口信夫を会長とする日本民俗協会(今・蔵田・竹内の3人は会員だった)が月刊で発行する『日本民俗』に間借りして抜き刷りを会員に配布するというスタートだった。

民家研究会は目的を「史的研究」「現状調査」「改良計画」とし、過去と現在を踏まえ将来の民家を考えていくことを目的としていた。民家を過去の日本人の伝統的な生活の形態として史的研究の対象としてだけみなすものではなかった。あるいは郷愁や愛玩の対象にしたりするものでもなかった。民家を新たに作り替え、生み出していこうとしたところにその特徴がある。実際、民家研究会が発足した1933年頃から、今和次郎らは農山漁村の民家の改善に取り組み始める。1934年には農林省積雪地方農村経済調査所の委託により山形県鮭川村の調査を行い、1936年からは東北地方農山漁村住宅改善調査に関わっている。ただし、蔵田周忠は山形県鮭川村の調査に加わるなど農山漁村の民家の改善に関わりつつも、今和次郎や竹内芳太郎とはまた別の指向性を有していたといえるだろう。今和次郎たちは、気候風土や生業を条件としながら形作られてきた民家の歴史と現状を調査し改善案を提示するとともに、素人や大工を対象とした改良住宅の間取り案の懸賞募集の実施や大工講習会の開催を通じて、その土地で暮らす人びと自身もつ環境を造型し生活を変えていこうとする力を見出し育てていこうとした(祐成2008)。それに対して蔵田周忠は、一方では今

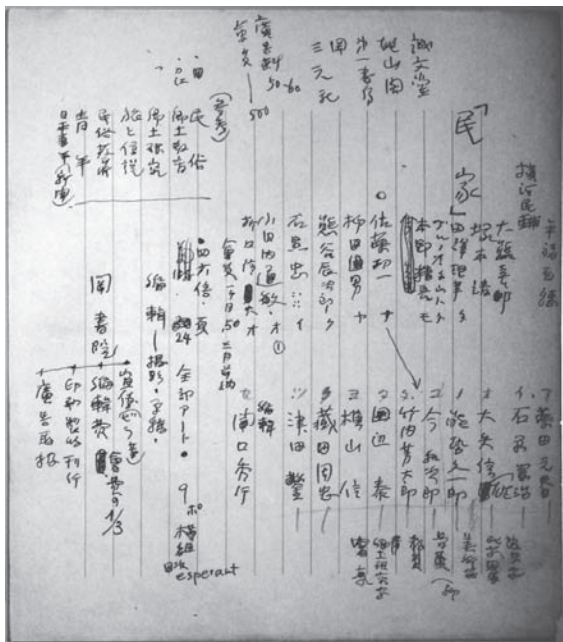


写真2 民家研究会の発足の打ち合わせメモ(東京都市大学図書館蔵田文庫所蔵)



写真3 『日本民家の模型製作に就て』(東京都市
大学図書館蔵田文庫所蔵)

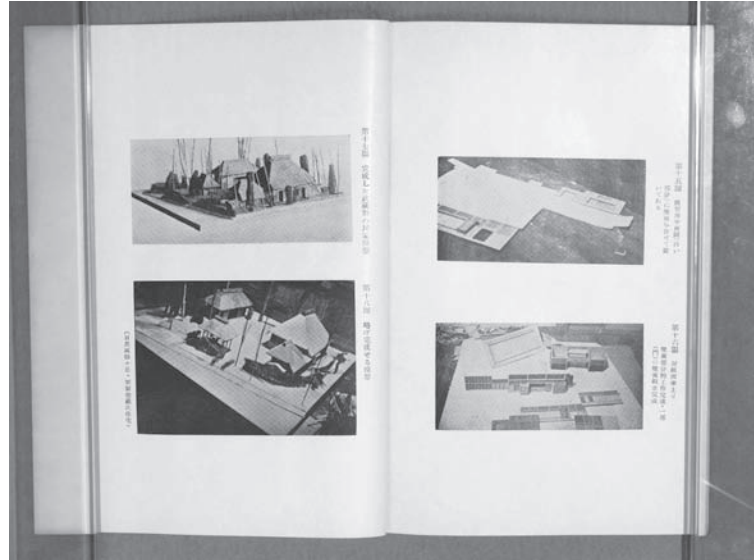


写真4 『日本民家の模型製作に就て』における製作工程の紹介(東京都市大学図書館蔵
田文庫所蔵)

和次郎らと同様にその土地で生活する人びと自身による民家の造形力に共感し生活改善に関わってもいたのだが、他方ではモダニズム住宅の設計や東京横浜電鉄に持ちかけた郊外住宅地である等々カジードルンクの開発計画、型而工房における家具の製作や販売など、資本にもとづく工業化・産業化によって都市や郊外に暮らす中産階級の生活を変えていくことを試みている。

蔵田周忠の民家研究の独自性として特筆しなければならないのは、民家模型のつくりかたの手引きである『日本民家の模型製作に就て』を執筆し、1934年に大日本聯合青年団郷土資料陳列所から出版していることである(写真3)。この手引きでは民家の選定基準と実測・製図の仕方、用具と材料、そして実際の工程について写真入りで説明している(写真4)。

発行元である大日本聯合青年団郷土資料陳列所とは、明治神宮外苑に建つ日本青年館内に設けられた民俗博物館である。小規模であり開館していた期間が1934年から1937年と短かったため今日の民俗学の歴史でも顧みられることはほとんどないが、専任の研究者がおり全国から収集した標本を展示する本格的な民俗博物館だった。大日本聯合青年団郷土資料陳列所は、渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムとも密接な関わりをもっていた。渋沢敬三は資本主義の父とも(2)言われる渋沢栄一の嫡孫として生まれ、銀行家・実

業家として活動し日本銀行総裁や大蔵大臣も務めた人物である。その一方で自邸内にアチックミュージアムという私設の研究所を設け、仲間とともに民俗学や民族学、水産史の研究に取り組み、国内外の資料を調査・記録・収集していた。大日本聯合青年団郷土資料陳列所の開設に際して渋沢敬三は郷土玩具200点を寄贈しており、またアチックミュージアムの同人であり服飾史の研究者である宮本勢助は自らが収集した農山村の労働着である山袴を標本として寄贈している(館史編纂委員会・編纂作業委員会編1991:244-255)。

蔵田周忠は大日本聯合青年団郷土資料陳列所の民家展示の製作に、今和次郎と竹内芳太郎とともに関わっている。製作・展示されたのは、150分の1の民家模型により全国の民家の形態を総覧できる分布図、50分の1で再現した民家模型、改善例を示した実物大の農家の模型の3種類である。このうち50分の1の民家模型の製作について中心的な役割を担ったのが蔵田周忠であり、製作方法を広めるために出版したのが『日本民家の模型製作に就て』であった。

1933年の民家研究会の発足も、打ち合わせと例会の会場が日本青年館であることが示しているように、大日本聯合青年団郷土資料陳列所における民家展示の製作のために関係者が集ったことが一つのきっかけになっている。1933年12月15日に開催された第1回例会では蔵田周忠が製作した東京市目黒区緑ヶ丘の民



写真5 蔵田周忠製作の民家模型を前にした記念写真。後列左端が蔵田周忠、前列左から二人目が今和次郎、前列右端が竹内芳太郎（東京都市大学図書館蔵田文庫所蔵）

家が披露された。蔵田文庫にはこの民家模型を前にした記念写真（写真5）が所蔵されており、裏には「昭和8年秋 日本青年館地階① 郷土資料室にて武蔵野の民家模型製作」と鉛筆で書き記されている。

蔵田周忠は模型製作の目的を、文明の浸透や都市の膨張により消えつつある民家の記録を研究資料として残すことだと説いている。

偶々大日本聯合青年団の仕事の一部として郷土資料の蒐集が行はれてゐるのは、我々〔民家研究会一筆者補〕の主旨と合致する処なので、これ等の農具工具玩具等と共に、之等全部を保有して全生活を包含し今日に来つた民家が蒐められるならば、そして後に一大郷土博物館建設の機も熟するに至るならば、全体として土俗学上に或は建築工芸学上に豊富にして正確なる資料を提供することが出来るであらうし、種々な方面からの研究者に

益する処極めて大なるべきを信ずるものである（蔵田 1934a : 2）。

ここで注目したいのは、民家を農具や工具・玩具などと並列するものであるとともに、それらをすべて包含するものとして位置づけていることである。建築史的な民家研究のように建物としての民家だけを取り出すのではなく、生活道具なども含み込む生活の全体像を表すものとしての民家を資料の対象としている。模型製作の対象も、母屋のみならず門や便所、納屋などの周囲の小建築物、さらには樹木や畑などの植生も含んでいる。選定する民家は「一定の地方では寧ろ極めて平凡なもの、その地方の人にとっては何等もの珍しいものではない家」と指定し、名家や豪農の家は他の地域との交流も多く必ずしもその地域の民家の特徴が現れているわけではないという理由から対象から外している（蔵田 1934a）。戦後成立した文化財保護法により重要文化財として指定される民家は、建築年代が古く大規模な民家を選ばれる傾向が強くなるが、蔵田周忠が設定する選定基準はそれと異なり、ごく一般の人びとの生活に即した民家であることが重視されていた。

この手引きをもとに他に4点の民家模型が今和次郎や竹内芳太郎、小倉強らによって製作され、蔵田周忠が製作したものとともに大日本聯合青年団郷土資料陳列所で展示された。また、この他にも武蔵高等工科学学校の学生たちにより民家模型が製作されている。表1⁽³⁾は、製作された民家模型の一覧である。

表1 民家模型一覧（※印は大日本聯合青年団郷土資料陳列所で展示されていたもの）

製作年	製作した民家	製作者
1933年	東京市目黒区緑ヶ丘の民家※	蔵田周忠
1934年	埼玉県金屋村の民家※	金屋村青年団
1934年	徳島県美馬郡西祖谷山村の民家※	今和次郎・竹内芳太郎
1934年	秋田県南秋田郡豊川村の民家（石川理紀之助生家）※	高橋嘉右衛門
1934年	岩手県紫波郡矢巾の民家※	小倉強
1936年	新潟県中魚沼郡吉田村小泉林嘉平太氏宅	武蔵高等工科学学校民家研究会学生
1937年	奈良県白毫寺山本重八氏宅	武蔵高等工科学学校民家研究会学生有志
1938年	埼玉県入間郡高麗村字本郷清水與重郎氏宅	武蔵高等工科学学校建築学科13年度一年生
1939年	山梨県勝沼の民家	武蔵高等工科学学校民家研究会学生
製作年不詳	大分県英彦山麓守田氏宅	潮見美那人（武蔵高等工科学学校学生）

大日本聯合青年団郷土資料陳列所が1937年に閉館した際に、展示されていた民家模型は日本民族学会附属民族学博物館に委託された。⁽⁴⁾ 渋沢史料館所蔵の「日本民族学会附属博物館陳列品目録」をみると民家模型が4点展示されていたことが確認できる（横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編2002：125）。その後民家模型は、時期は不明だが、1962年の閉館前にそれぞれの製作者に返還されたようである。蔵田周忠の『民家帖』には自身が製作した東京市目黒区緑ヶ丘の民家模型が、武蔵高等工学校民家研究会の学生たちが製作したものとともに武蔵工業大学建築学科の標本室に保存されていることが記してある（蔵田1955）。ただし現在、その行方は分からなくなっている。今日確認できるものとしては、工学院大学図書館が所蔵する今和次郎と竹内芳太郎が製作した徳島県西祖谷の民家模型がある。

以上のように、蔵田周忠は今和次郎に師事することによって民家研究へと進み、さらには博物館に展示する民家模型の製作にもたずさわっていた。このような蔵田周忠の1920～30年代における民家研究を入り口にした民俗学への参画は、等々力ジードルンクといった郊外住宅の開発や型而工房における都市生活者のための家具の設計と同時期に行われていた。大川三雄が指摘するように「常に前衛であり続けたかに見える蔵田の姿勢は、実は市井の人々の生活に対する温かい眼差しに支えられたもの」（大川2009：5）だった。民家研究とモダンデザインを両輪として、生活の過去を顧み現在を踏まえた上で、未来の生活を設計していこうとしたのである。

II 民家と博物館——民藝運動との対比から

蔵田周忠の民家研究についてより考察を深めるために、同時代の1930年代における民藝運動の民家の扱い方と、それに対する蔵田周忠の批判について検討することにしたい。

日常の生活道具に「用の美」を追求する民藝運動の担い手たちは、建築についても民藝的な審美眼で捉え、民家を移築したり民家に想を得て新築した家に暮らしていた。陶芸家の濱田庄司は滞英生活の後に帰国

した1930年、栃木県益子に生活と作陶の場を構えたが、その自邸は隣町の農家の母屋を移築したものであった。1935年に建設された柳宗悦の自邸は道路に面した長屋門とその奥にある入母屋屋根の外観の居住部分によって構成されているが、長屋門は栃木県の日光街道沿いにあった豪農の長屋門を買い取って移築したものであり、後者は柳宗悦自らが設計したものであった（藤田治彦・川島智生・石川祐一・濱田琢司・猪谷聡2010）。1936年に竣工した日本民藝館も外観・内装ともに民家調であり、民藝を収蔵して展示する施設であるばかりでなく、それ自体が一つの民藝の作品であった。

このような民藝運動における民家の扱い方について、蔵田周忠はどのように考えていたのだろうか。『近代的角度』に収録されている1929年初出の文章では、藁葺屋根や土壁の民家が時代の変化にともなって消えていき瓦屋根やトタン屋根、白い漆喰や人造石の壁、ペンキ塗りの看板へと置き換わっていくことを惜しみながら、民家を民藝として捉える視点を提示している。

かうふう事に出会ふ度に記録をとつて置かなければ、と節に思ふ。——この心は柳さんの謂はれる過去の「下手物」を保存しておきたいと願ふ心と共通するものがあるでもあらう。

さういへば民家とか住家とかは全く一種の民藝であることが考へられる。その住ふ人々の個人個人の用に適応し、経済上の制限を受けつつ、しかも時代なり民俗なりの趣味を反映するといふやうな点で、最も生活に切実であつて、用がはつきりしてゐながら、客観的な規律では容易に解決出来ない性状を持つてゐる。そしていちがいに過去のものとして放棄するには余りに生活に近しく、新しい生産では作ることの出来ない美を持つてゐる点で、民家は「下手物」の民藝だといふことが出来やう（蔵田1933：189）。

住む人の用に応じて形づくられた民家の姿に美が現れ出ているという点において、民家を民藝として捉え得る眼差しを受け入れている。その上で民家は工芸品

のようにスケールが小さいわけではないので博物館などに収集できないため、写真や実測図・スケッチの形で記録をとっていく必要性を主張している。

このように蔵田周忠は民家を民藝として捉えることには肯定的であるが、しかしながら民藝運動の担い手たちが行っていたように民家を移築再建したり、民家のおもむきに似せて建造したりすることについては批判的であった。1935年初出の文章では次のように述べている。

丁度工藝に於ける下手物（げてももの）がもて囃されるやうな勢で民家は好事家の尊重する処となつた。しかし直接に古い民家を再建または模索することは、結局個人の好みによるのであつて、全く下手物を高価な値段で買つて珍重するのと少しも変つた処はない。——その是非を論じやうとするのではないが、ここに言ひたいのは斯様な意味での民家趣味と民家研究とは自ら異つた立場にあることを注意してをきたい。民家研究の方では目下の処、出来るだけ多くの資料を蒐集してをきたいのであるから、古い典型的な民家が保存されることは極めて望ましいことの一つであるけれども、生活は成長し推移する。新しい時代の生活に古い民家の形式をそのまま、古を今に適用し再建することが不適當であることは誰しも気付かれることに違ひない（蔵田 1940：50）。

このように批判的に述べた上で、蔵田周忠は建築家として古い民家の再築を依頼されたらどうするかという課題に対して、全く忠実に再現するかむしろ積極的に新しい解釈を加えて改造し不調和の調和で組み立てると一応は答えつつも、「けれども出来るならば、全然新しい時代の——流線型自動車の走る時代の新しい民家を建てられるやうに勧めやう」と結んでいる（蔵田 1940：54）。

具体的な人物名はあげられていないが、この文章は明らかに民藝運動の担い手たちを批判したものである。そして柳宗悦らのような「好事家」たちの「民家趣味」を、自分たちのよって立つ民家研究とは立場が異なると差異化している。『日本民家の模型製作に就

て』でも「一言してをきたいのは、斯様な模型製作のやうなことが、ややもすると好事家の遊びと誤解されることがあるから、我々の真摯な研究態度の基本を明らかにしてをく必要があると思ふ」と述べ、模型製作が趣味的に消費されてしまうことに懸念を示して釘を刺している（蔵田 1934a：1）。

蔵田周忠は、「我々の真摯な研究」が「好事家」たちの「民家趣味」のようなディレッタンティズムと混同されることを嫌ったが、その批判は単に感情論から発せられたのではなく、その根底には民家を捉える方法論の違いがあった。

蔵田周忠にとって民家とは何だったのか。蔵田周忠は民家の細部についてそこで暮らす人びとや土地の大工が生み出す造型の美しさを鑑賞する。たとえば民家模型をつくった東京市目黒区緑ヶ丘の民家について、母屋が二階建ての納屋と連続した形をしていることに、「意匠としての変化もあり、使いやすいよい計画である」と指摘する（蔵田 1955：96）。この納屋はもとも母家の西側にあった隠居の部屋を東側に移築して納屋として使っているのだが、住む人の都合によって生まれた「よい構成」を「形態上のたくみなしに自然に出来た構成なのである」と評価する（蔵田 1935：301）。あるいは棟の両端の小妻にある小さな空気抜けの工夫を観察して「屋根屋さんの腕を示す技巧がそのあたりに溢れた生気を感じさせる」と嘆賞する（蔵田 1955：101）。

付け加えるならば、蔵田周忠はバウハウスをはじめとするモダンデザインの思想にいち早く影響を受けて日本に紹介し、建築設計にも取り入れた人物ではあるが、民家の簡素な構造にモダニズム建築に通じる美学を見出す審美眼とは異なる眼差しで民家を捉えていた。藤森照信は、1937年に大阪の吉村家住宅の保存を手掛けた藤島玄治郎や、戦後文化財保護法にもとづき有形文化財として民家の保護を進めた関野克、太田博太郎は「作る人」の立場で民家の魅力を捉えそこで暮らす人びとの生活を除外していたと指摘し、そこにモダニズムの美学の影響が存在すると指摘している（藤森 2009）。藤森はそれらに対して今和次郎は「使う人」の立場で民家を捉えていたとしているが（藤森 同前）、その姿勢は今和次郎に師事した蔵田周忠も同

じであった。

そして蔵田周忠にとって民家とは、かつての形態のままとどめおくものではなかった。なぜならば生活は移り変わっていくのだからかつての姿のままでは適応できないからだ。生活の変化に応じて新たに改善し改良していくのは民家研究会の目的でもあった。そのため、博物館で民家の現状を研究資料として記録し保存することが重要になる。「下手物の銘器が保存されるやうに、民家を中心とする民族博物館を設立してこれに保存するのが最上」であり、「左様なよきものを持つ我々は、また我々の時代として、これ等先人に劣らないものを作るべき」であって、そのように保存された「民家の精神と郷土性に学ぶべき内容を求めるのであつて、細部的な模写を必ずしも必要としない」のである（蔵田 1940：53）。博物館とは失われていく民家の現状を研究資料として保存していく施設としてだけでなく、そこで保存されている民家を参考にして新しい民家を生み出していく造型力を得ることができる施設であると考えていた。このように考える蔵田周忠からすれば、民藝運動における民家の移築や民家風の建造といった表層だけを愛玩し取り入れようとする民家趣味は、そのデザイン思想と相容れない行為だった。

このような民家趣味に対する批判は、柳田国男の郷土玩具趣味に対する批判と響きあうだろう。加藤幸治は柳田国男が郷土玩具趣味を批判した理由を、自らの研究が数をきそってコレクションの増加ばかりを目的化する趣味の徒と同一視されることを嫌ったという感情的な側面ばかりではなく、「人々が本来持っていた生活を不断に更新していくダイナミックな流動性と創造性を、大人が子どもに与えたり、大人が子ども時代を懐かしがって消費したりする郷土玩具や童話が、阻害してしまうと考えたからである」と指摘している（加藤 2011：239）。

蔵田周忠は日本民藝協会が 1942 年 12 月に発行した『月刊民藝』に「住文化と家具」と題した文章を寄せているが、そこでも家具について民家と同様の議論を展開している。蔵田周忠は住文化を住まい方によって要求される一つひとつの家具が相集まって統一ある生活空間を作り上げるものだとしている。そして自分が民家の調査で観察した竈の前に据えられた切り株の腰

掛けや嫁入りの時の箆筒を例としてあげながら、自然にその場所に与えられたもののように用に耐えなくなるまで、あるいは用に耐えなくなっても身体の一部のようにいつくしむ住文化を日本人はもっていることを指摘する。しかしながら、生活は変化していくのだから昔の通り復古することは不可能である。そこで「これまで懐かしみいつくしんできた大切なものは、設備のよい民藝館などに蔵つてもらっておいて、時々それを眺めつつ、新しい道を開拓しなくてはならない。新らしく工夫してゆくのである」と提言している（蔵田 1942：6）。

蔵田周忠は民藝運動に一定の理解を示し、民藝館の意義も評価しつつも、実生活にそのまま民藝的なものを取り入れていくことには否定的だった。そしてまた、大日本聯合青年団郷土資料陳列所に展示する民家模型の製作に取り組みながら構想した民俗博物館のあり方は、戦後になって国や都道府県、市町村によって設立された歴史民俗系の博物館のあり方も異なっていたと言えるだろう。今日、博物館における民俗文化の収集・保存・展示・研究はもっぱら民俗学や文化財保護の観点からなされている。民俗学や文化財保護を基盤とした博物館活動が重要であることは言うまでもないことだが、ともすれば民俗学という専門分野や法の規定の内部に自閉しその内部だけで完結してしまうきらいがある。民俗博物館の胎動期である 1930 年代において蔵田周忠は、建築家であるとともに民家研究を行う者として、博物館を過去の生活を記録し保存するとともに新しい時代における新しい生活をつくり出していくデザインの起点となる場として考えていたのである。

Ⅲ 「民藝博物館計画案」について

— 皇紀二千六百年記念

日本民族博物館本館の可能性の検討

これまで蔵田周忠の民家研究が民家展示の模型製作にまで展開し、さらに独自の民俗博物館論を有していたことについて考察してきた。ここで東京都市大学図書館の蔵田周忠文庫に所蔵されている「民藝博物館計画案」と題された設計図について紹介してみることにはしたい。「民藝博物館計画案」はトレーシングペーパ



写真6 民藝博物館計画案の設計図（東京都市大学図書館蔵田文庫所蔵）

ーに鉛筆で描いたものが5枚、それを青焼きしたものが5枚の合計10枚で構成されている（写真6）。ここでは、印刷した際の見やすさの観点から青焼のものを掲載することにしたい（写真7～11）。トレーシングペーパーと青焼きは基本的に同一であるが両者ともに他方には見られない書き込みが若干存在する。蔵田文庫に設計図が残されているだけであり、蔵田周忠の署名はなく、設計の目的や経緯、作成年月日などの情報も記載されていない。

前章で述べたように蔵田周忠は民藝を博物館に保存すること自体には肯定的であり、「民藝博物館計画案」という建築名からすると民藝を収蔵・展示するための博物館の設計図だと考えることもできなくはない。しかしながら本章で検討するように、この設計図は皇紀二千六百年記念日本民族博物館の本館の設計図と考えるのが妥当であると思われる。

皇紀二千六百年記念日本民族博物館とは、西暦1940年を神武天皇が即位してから2600年目として祝賀するイベントの一つとして計画された博物館⁽⁵⁾である。1930年代にナショナリズムが高揚する中で、万国博覧会や東京オリンピックの開催などをはじめとして大小様々な祝賀イベントが計画された。国史館をはじめとして多様な博物館の建設運動も進められている（金子2001）。皇紀2600年が大々的に祝賀された背景には、単に天皇の治世を言祝ぐばかりでなく、この機会に便乗して長年構想してきたイベントや施設建設を一気に進めるという実利的な目的もあったようだ（古川1998）。だが、日中戦争と戦局の悪化の影響もあり、万国博覧会やオリンピックをはじめとして多く

のイベントや施設建設は実現に至らず、皇紀二千六百年記念日本民族博物館も開館することがないまま終わった。

皇紀二千六百年記念日本民族博物館の設立構想の中心にいたのが渋沢敬三だった。先にも述べたように、渋沢敬三はアチックミュージアムという研究所を自邸に設けて仲間とともに研究を行っていたが、その活動は渋沢がかつて滞欧していた際の1924年に見学したスウェーデンの北方民族博物館とスカンセンのような民俗文化についての博物館を設立する構想へと展開していった。北方民族博物館は屋内で展示する博物館であり、スカンセンではスウェーデン各地の伝統的な民家や教会などを移築し生活を再現した野外博物館である。

この構想を具体化すべく、1936年8月に渋沢敬三も加わる設立委員会の委員長岡部長景から文部大臣に対して建議されたのが皇紀二千六百年記念日本民族博物館である。建議案によれば、設立の際にはアチックミュージアムで収集した標本を寄贈することになっていた。また渋沢敬三が私財を提供するとともに、アチックミュージアムの同人だった高橋文太郎は保谷町（現西東京市）の自分の土地の提供することを申し出ていた。

皇紀二千六百年記念日本民族博物館の展示は、スウェーデンをはじめとする北欧の民俗博物館にならない、本館における「屋内展観」と、野外博物館となる「屋外展観」によって構成されていた。屋内展観と屋外展観は相補的な関係にある。屋内展観は民俗文化に関する標本を分類し体系的に展示する施設である。渋沢敬三に関する資料を収める渋沢史料館に所蔵されている「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立建議案」によれば屋内展観は「貴族、士族、農民、工民、商民、牧畜民、漁民、鋳民、運搬業者、其他特殊的職業者又ハ職業団等一般衆庶ノ生活技術ニ用ヒラレタル各種造型物」を対象とし、衣食住、生業、通信運搬、団体生活、儀礼、信仰行事、娯楽遊戯、玩具縁起物を展示するとしている。屋外展観は移築した民家に家具などを配して生活のまごとを再現し、国内の民俗文化をパノラミックに展示する。屋外展観については今和次郎が作成した俯瞰図が工学院大学図書館に所蔵されてい

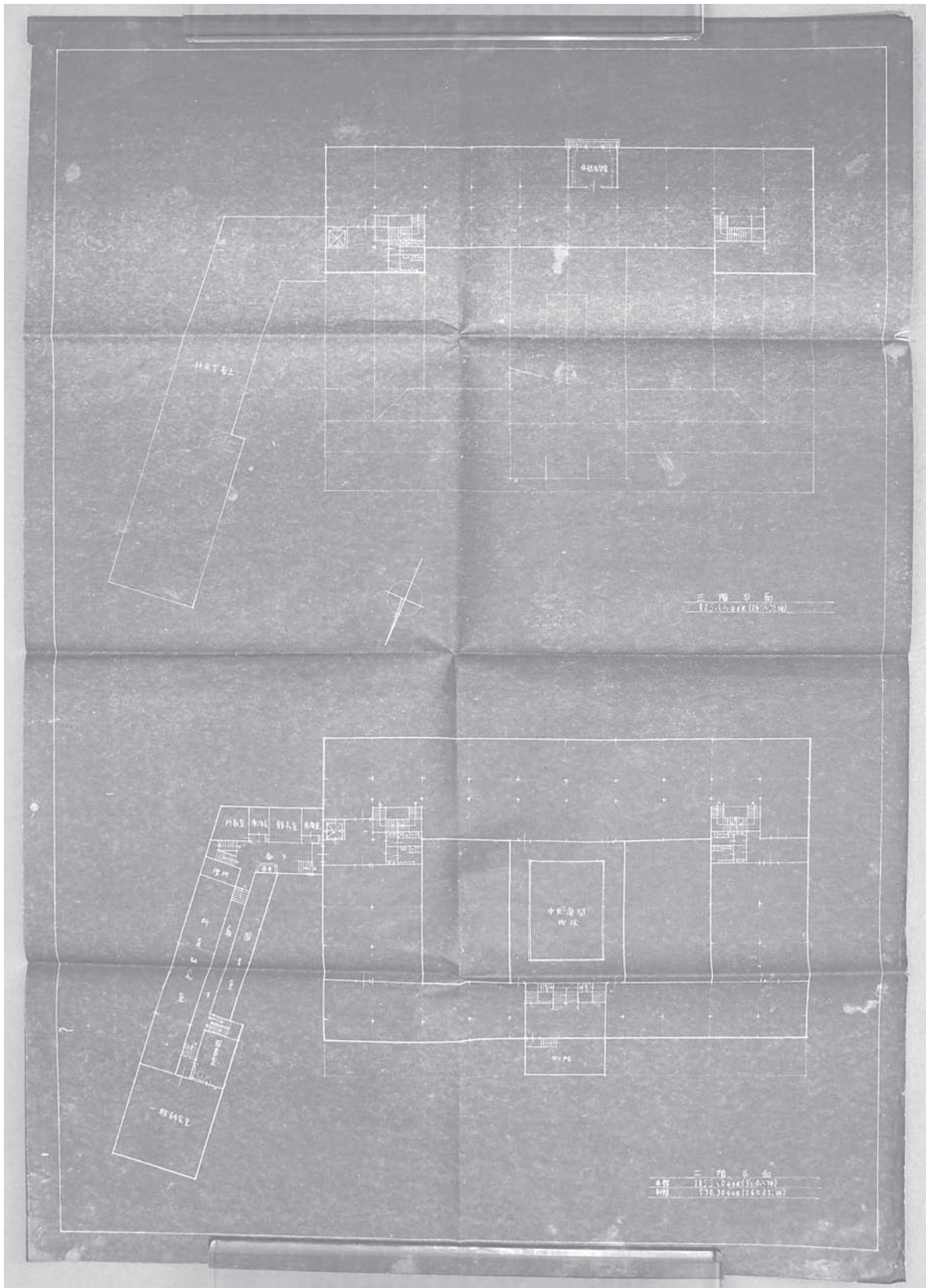


写真7 民藝博物館計画案 その1 (東京都市大学図書館蔵田文庫所蔵)

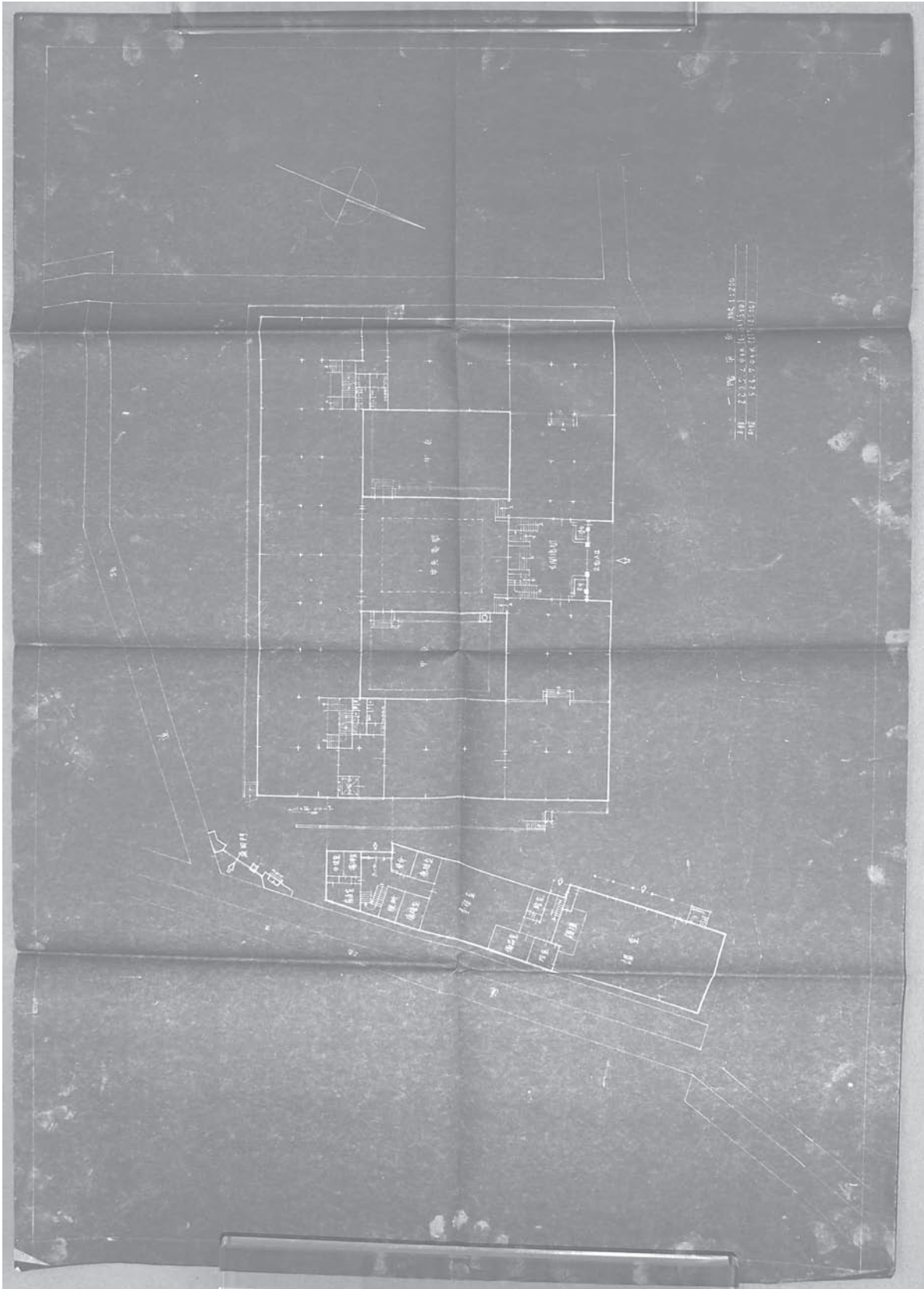


写真8 民藝博物館計画案 その2 (東京都市大学図書館蔵田文庫所蔵)

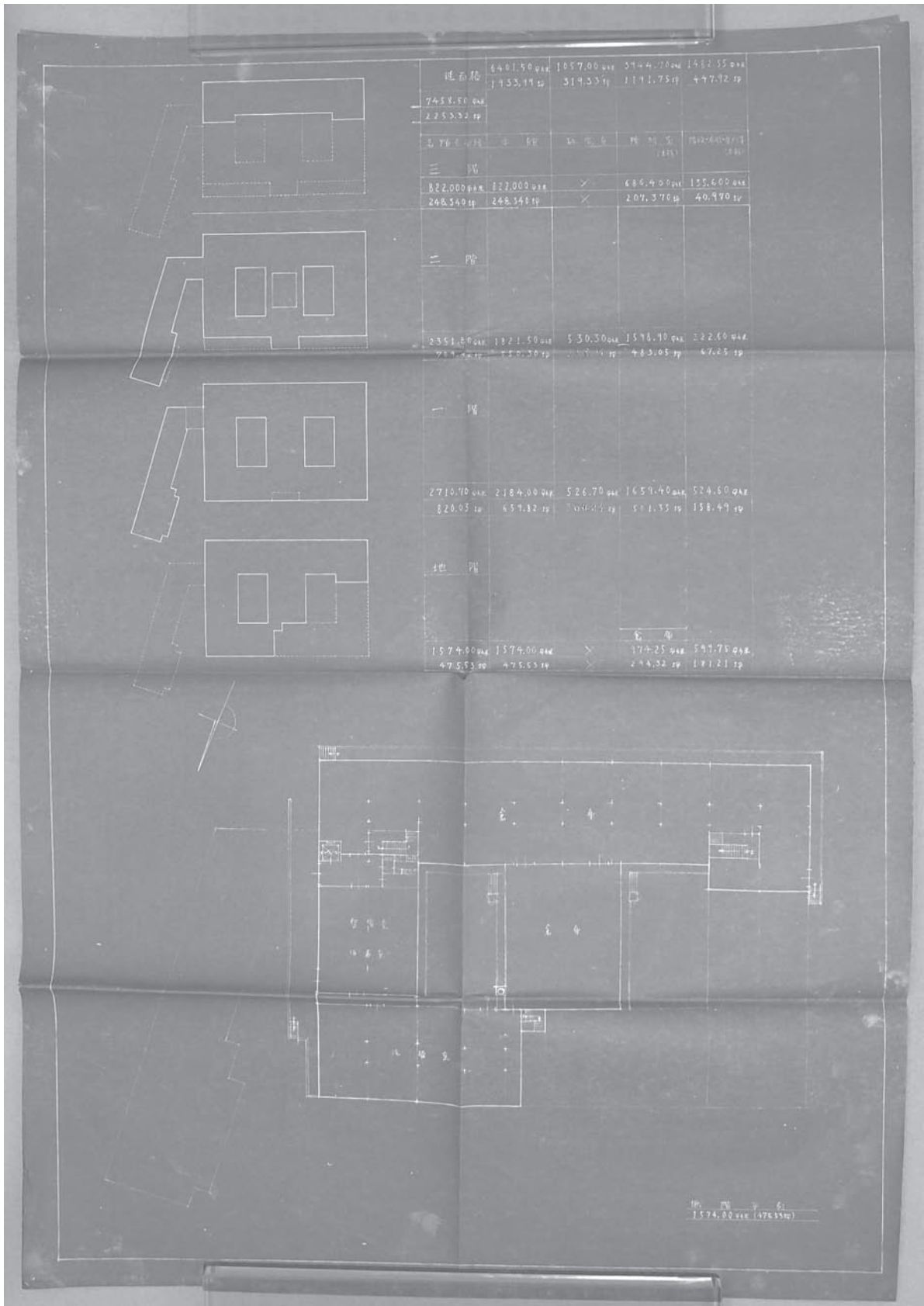


写真9 民藝博物館計画案 その3 (東京都市大学図書館蔵田文庫所蔵)

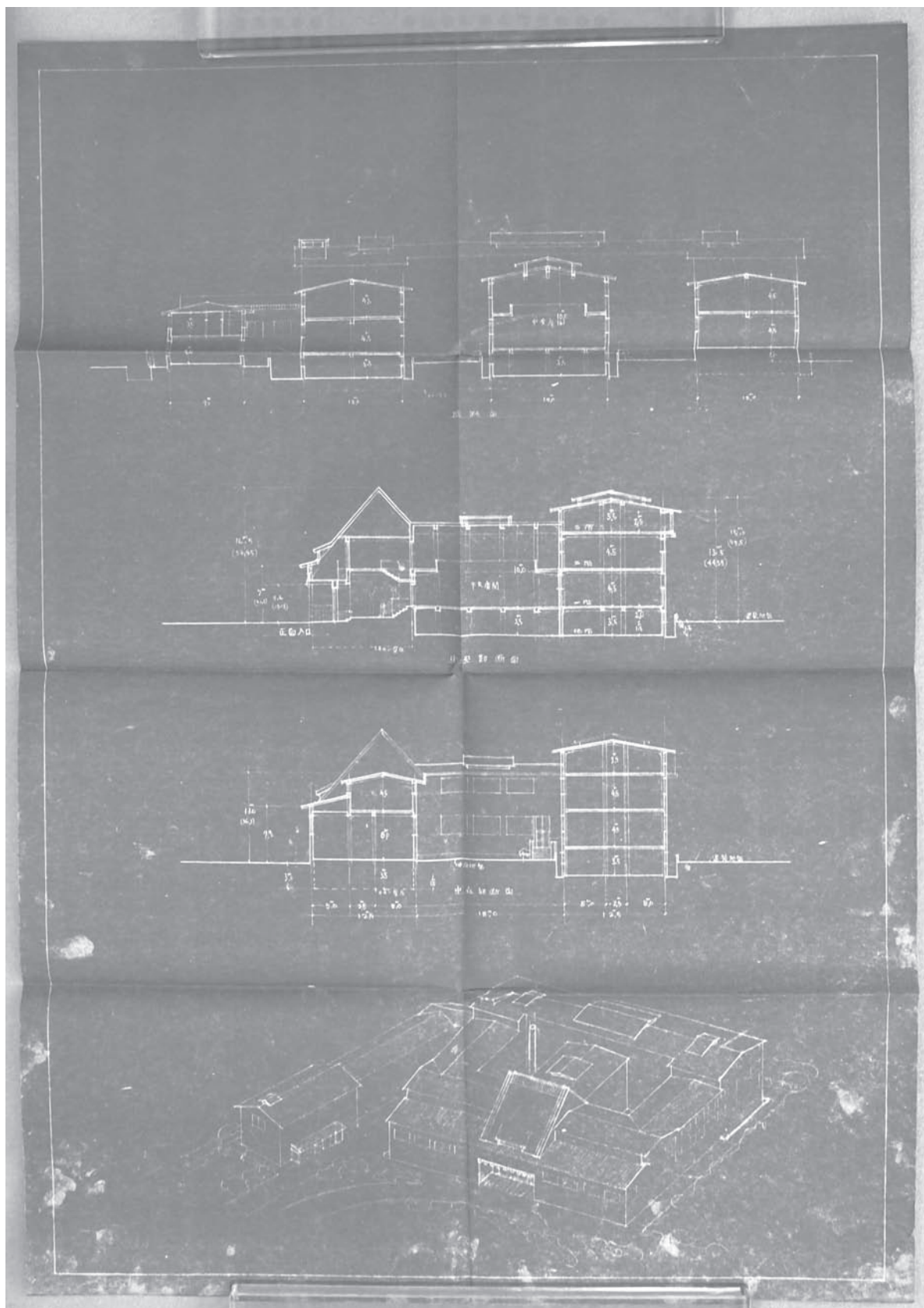


写真10 民藝博物館計画案 その4 (東京都市大学図書館蔵田文庫所蔵)

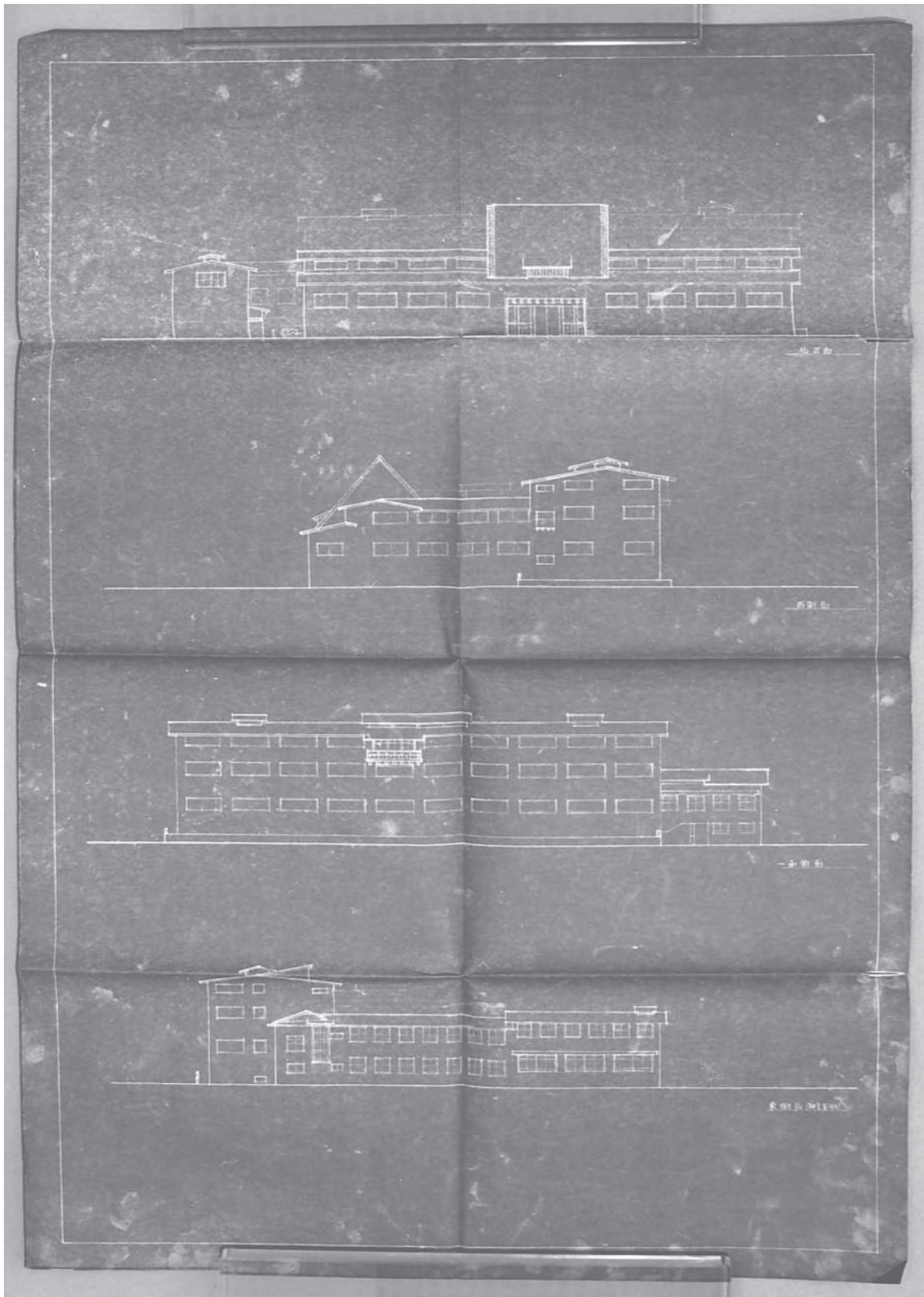


写真 11 民藝博物館計画案 その5 (東京都市大学図書館蔵田文庫所蔵)

る。俯瞰図には朝鮮・台湾などの当時の日本統治下にあった朝鮮半島や台湾のものも含めた各地の民家や民族植物園、さらには炭焼き小屋などの生業に関する小屋類から各種の井戸や厠などまで描き込まれている。全国各地の民家を一同に会して展示するという大胆な構想力が現れているとともに、人びとが日々の営みの中で作り出してきた生活についての今和次郎の細かな観察眼が現れている。

皇紀二千六百年記念日本民族博物館は敷地や建設資金、展示手法などについてきわめて具体的な計画が立てられていたが、政府はなかなか実行に移すことはなかった。そのため、渋沢敬三と高橋文太郎たちは手始めに日本民族学会附属の博物館設立を目指す。保谷町に東武鉄道の仮事務所を譲り受けて日本民族学会附属研究所とし、また鉄道省の工事場事務所を展示棟とした。建築顧問として敷地割を確定したのは今和次郎であり、第一号の屋外展示物として高橋文太郎所有の武蔵野の民家が、蔵田周忠が主宰する武蔵高等工学校民家研究会の学生らによる解体前の実測図をもとにして今と竹内芳太郎の監督により移築された⁽⁶⁾。日本民族学会にアチックミュージアムの標本を寄贈して学会附属の民族学博物館が開館したのは1939年のことである。建物は木造でありとても立派とは言えないものだったが、これは渋沢敬三が「恒久的なものではなく、ひとまずこうしておけばやがて本格的なものを作り得るだろうと考えてのこと」(宮本1979:53)だった。しかし、ついに政府の入れるところとはならず、戦後の1962年に収集した標本を国に寄贈して民族学博物館は閉館する。その後、標本は1974年に国立民族学博物館が設立された際に移管された。

以上見てきたように、皇紀二千六百年記念日本民族博物館の本館は、実際には建設されることがなかった幻の建築である。その設計者については言及している資料が見つからないためこれまで全く不明であり、従来の研究においても特に論じられてこなかった。東京都市大学図書館蔵田文庫に所蔵されている「民藝博物館計画案」は、名称こそ異なるものの、様々な点において皇紀二千六百年記念日本民族博物館本館に関する資料の情報と一致している。先に見てきた今和次郎との関係や、アチックミュージアムが深く

かかわっている大日本聯合青年団郷土資料陳列所の博物館展示への取り組みなどを考え合わせるならば、蔵田周忠が設計者だと考えることは十分に妥当である。

あらかじめ、これまでの見出されている資料でわかっている本館の建築についての情報を整理しておきたい。まず各部屋の区分と床面積については、渋沢史料館所蔵の「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立建議案」と国立公文書館所蔵の「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立趣意書」に記載されている。各部屋の区分についてはどちらの資料ともほぼ同様である。地上三階地下一階の本館に二階建ての別棟である研究室が附属する構成となっており、本館は地上三階部分が陳列室として割り当てられ、地下は倉庫と整備室・消毒室、そして汽罐室にあてられている。別棟の研究室は一階が講堂、控室、暗室、備品室、事務室、応接室、受付、小吏室、宿直室、湯沸室、便所となっており、二階が館長室、所長室、応接室、所員研究室、一般研究室、図書室、便所となっている。床面積については「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立趣意書」と「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立建議案」に記載されているものを表2にまとめた。「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立趣意書」の床面積は大まかな概算だけだが、「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立建議案」は小数点以下まで詳細に記されており、実際の設計図を元にして記入したと推察することができる。

外観については、工学院大学図書館今和次郎コレクションが所蔵している「日本民族博物館全景」(写真12)と題した作成時期不明の俯瞰図に描き込まれているものが存在する。なお国立公文書館所蔵の「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立趣意書」には「鉄筋コンクリートハーフティンバー式」とあり、ヨーロッパの木造建築風の建物を思わせるが、「日本民族博物館全景」の本館の建築はそれとは異なるものである。

蔵田文庫に所蔵されている「民藝博物館計画案」の設計図は、これらの皇紀二千六百年記念日本民族博物館本館の床面積および室名、そして外観についての情報と多くの点について合致するものである。

第一に、本館と別棟となる研究室の各室の区分が全く同一である。また第二に床面積については、写真9

表2 皇紀二千六百年記念日本民族博物館の床面積

	「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立建議案」		「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立趣意書」	
	本館	研究室	本館	研究室
総坪数	1933.99坪	319.33坪	2000坪	—
3階	248.34坪(陳列室207.37坪, 階段・広間・便所等40.97坪)	—	500坪	—
2階	550.30坪(陳列室483.05坪, 階段・広間・便所等67.25坪)	160.21坪	500坪	150坪
1階	659.82坪(陳列室501.33坪, 階段・広間・便所等168.49坪)	159.12坪	500坪	150坪
地階	475.53坪(倉庫294.32坪, 階段・広間・便所等181.21坪)	—	500坪	—

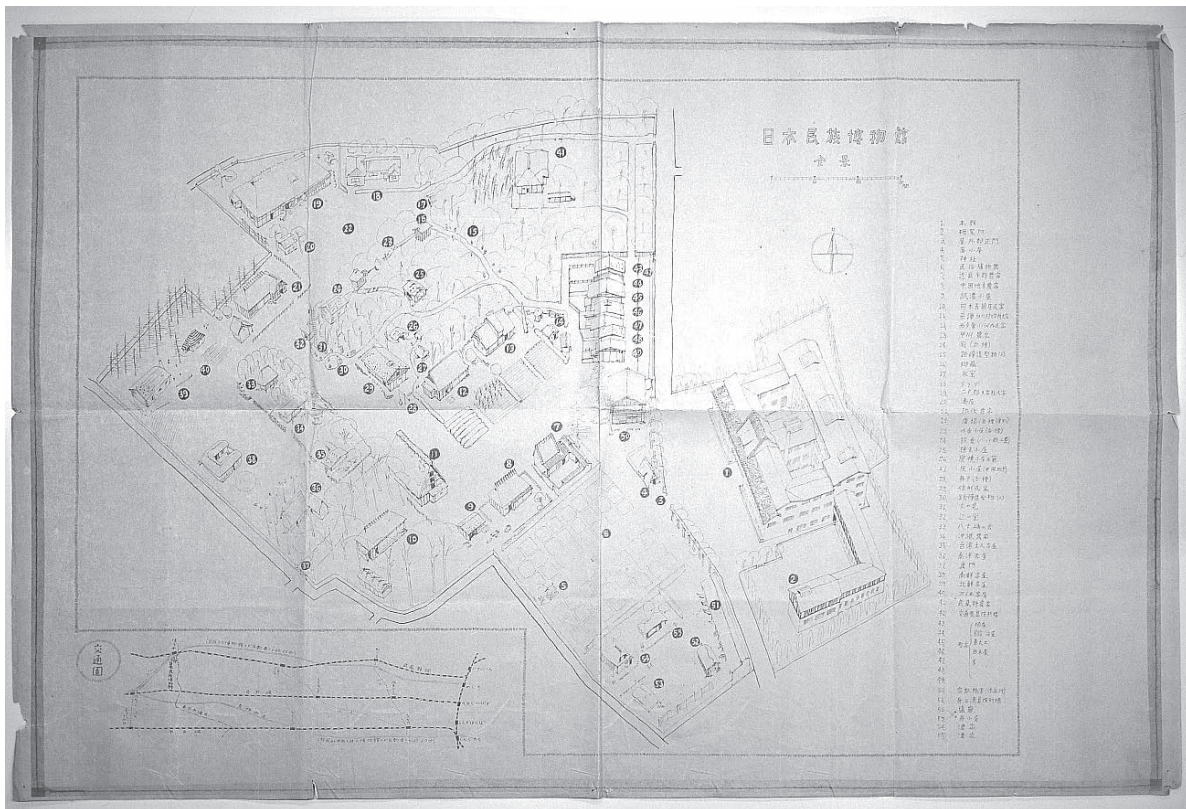


写真12 日本民族博物館全景(工学院大学図書館今和次郎コレクション所蔵)

の設計図に記載されている一覧表を表2と比較すると、「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立建議案」のものと小数点以下まで完全に一致している。このことから、渋沢敬三が「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立建議案」を作成するにあたって、「民藝博物館計画案」と同一の図面を参照したと推察できる。

第三に外観についてだが、今和次郎による「日本民族博物館」に描き込まれている本館の建築と、「民藝博物館計画案」の建築を比較すると両者は非常に似通っていることが一見してわかる(写真13, 14)。ただし細かく見ていくといくつかの相違点が存在すること

を指摘する必要があるだろう。まず建物の向きが異なり「日本民族博物館全景」では南西を向いているが、「民藝博物館設計案」では北西を向いている。また、別棟として附属する研究室が「民藝博物館計画案」では正面から向かって左側にあることに対して、「日本民族博物館全景」では右側にある。煙突の配置も逆になっており、両者は鏡像のようにになっている。本館と研究室の接続部分も、「日本民族博物館全景」のほうが長い。これらの相違が生じた理由については、双方ともに作成時期についての情報がなく、前後関係がわからず参考となる情報もないため、解明を今後の課題

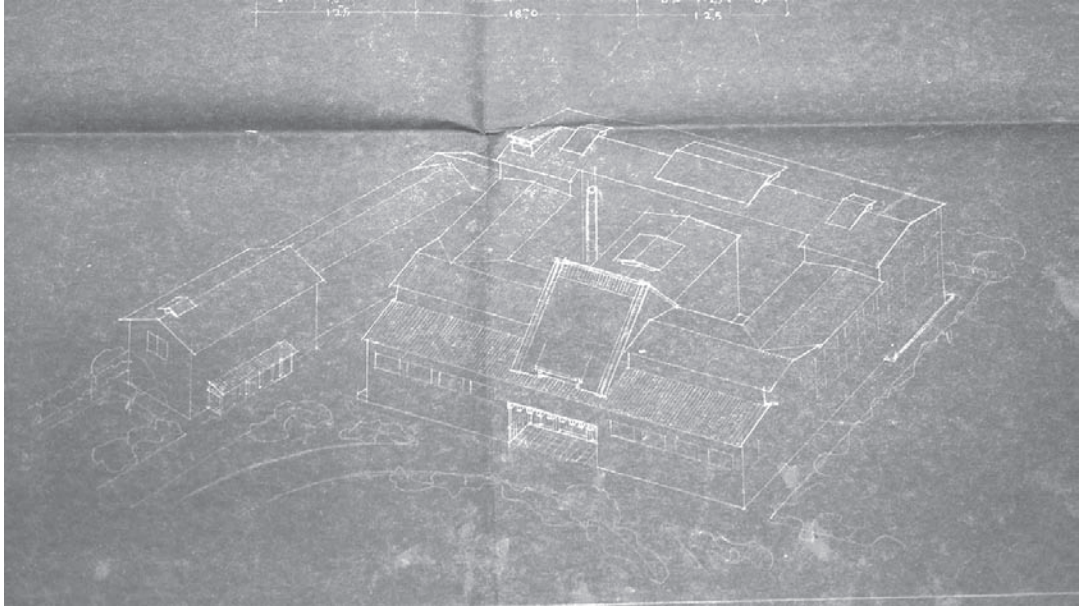


写真13 民藝博物館計画案における本館の外観（写真10の設計図の一部を拡大）

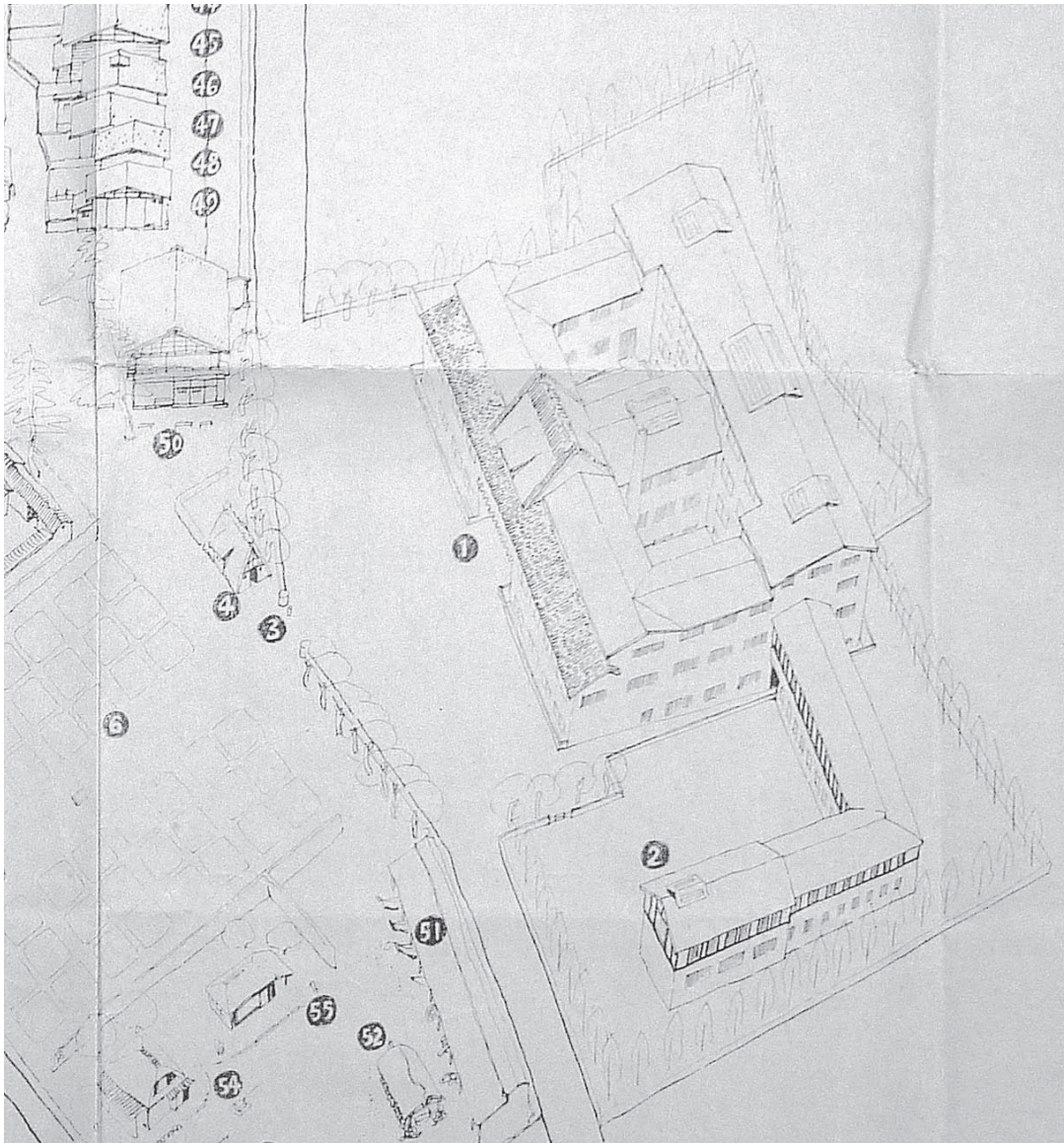


写真14 日本民族博物館全景における本館の外観（写真12の俯瞰図の一部を拡大）

とせざるを得ない。

以上の検討の結果から、東京都市大学図書館蔵田文庫所蔵の「民藝博物館計画案」は皇紀二千六百年記念日本民族博物館本館の設計図であることは確かである。蔵田周忠が皇紀二千六百年記念日本民族博物館の本館を設計したとするならば、その経緯は次のように推測できるだろう。渋沢敬三が皇紀二千六百年記念日本民族博物館を構想するにあたって敷地の活用計画の立案を今和次郎に依頼した。今和次郎は敷地全体の計画を立てるとともに屋外展観の設計については自分で担当し、本館の設計について弟子であり民家研究の仲間でもある蔵田周忠に依頼する。蔵田周忠は建築の設計や施工監理の経験が豊富であり、ヨーロッパ滞在中における各都市の博物館見学を通じて博物館建築に独自の知見を有していた。そして渋沢敬三は「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立建議案」の執筆に際して蔵田周忠が作成した設計図を参照しながら各部屋の名称や床面積を記入した。この推測を裏づける叙述や資料は存在しないため想像の域を出ることはできないのだが、しかしながらこのような流れでとらえると各部屋の区分や床面積が一致することについて合理的な理解を得ることができる。すでに述べたように「民藝博物館計画案」には蔵田周忠の署名はないが、仮に蔵田の設計ではないとしても、皇紀二千六百年記念日本民族博物館本館の設計図であることは間違いなく、今後のさらなる検証を待つことにしたい。

おわりに

本稿では、蔵田周忠と民俗学の関わりを明らかにしようとする立場から、民家研究の軌跡と博物館展示のための民家模型の製作の実践、民家や家具を収蔵して展示する博物館についての考え方について、主に1920～30年代の活動に焦点を合わせて検討してきた。また、蔵田文庫に所蔵されている「民藝博物館計画案」について検討し、この設計図が皇紀二千六百年記念日本民族博物館の本館の設計と部屋の区分や床面積において一致することを明らかにし、そして今和次郎による「日本民族博物館全景」の俯瞰図に描かれている本館と外観が酷似していることを指摘した。「民

藝博物館計画案」が皇紀二千六百年記念日本民族博物館の本館とする検証が妥当性をもつとするならば、そこには民家研究への取り組みによって培われた蔵田周忠の博物館論が託されていたと考えることができるだろう。

蔵田周忠の民家研究と、民家研究にもとづく博物館論は次のようにまとめることができる。

民家は農具や工具・家具などの生活道具と並列するとともにそれを包含する全体性ももっている。それらはそれぞれの土地における気候風土やその家の暮らしの中で造型され使われてきたものとして美しさをもつ。また暮らしの中で作られ使われてきた家具が集まって住文化を形成している。ただし、生活は推移し変わっていくものなのだから、民藝運動のように昔の形のままだに残してこれからの時代の生活に持ち込むことは不相当である。調査・記録して研究資料として残り、あるいは博物館において実物や模型を保存し、それらを参考として過去と現在の民家に学びながら新しい民家を生み出すべきである。言い換えるならば博物館とは、かつて人々が暮らしの中で形作ってきた民家の歴史と現状を研究資料として保存しつつ新たな時代の新たな民家を生み出す契機となる施設である。

蔵田周忠の民家研究は、暮らしのなかで形作られ用いられてきた民家や家具の造形美に感じ入りつつも、それをそのままに残すのではなく、よりよく改善し、あるいは新たに作り出そうとしたことに特色がある。そして具体的な調査や記録、保存と展示の場として博物館が位置づけられていた。博物館展示のために民家模型を製作することは、過去と現在そして未来の人々、また地方と都市の人々を結びつける場を用意する実践でもあったとすることができるだろう。このような蔵田周忠の試みと思想は現代においても、民家をはじめとする生活の捉え方において、そして博物館が同時代の社会とどのように関わることができるのかという点において、有益な視点と方法を提供してくれると考えられるのである。

注

(1) 『民俗芸術』第2巻第6号(1929年)では、第4回郷土舞踊と民謡の会の際に上演された各地の民俗芸能の

演者達の手振りや足の運びといった身体の表現や、衣装や道具についての蔵田周忠による詳細なスケッチが竹内芳太郎・図師嘉彦・宮尾しげをのものとともに掲載されている。郷土舞踊と民謡の会とは日本青年館で毎年開催されていた各地の民俗芸能を上演するイベントである。また、『民俗芸術』第2巻第9号(1929年)に収録されている図師嘉彦・本田安次・北野博美「諏訪神社田遊び祭りの記録」では蔵田周忠による祭りの様子や道具についてのスケッチが竹内芳太郎のものとともに掲載されている。

(2) 学芸員的な業務を担っていた大西伍一は1933年の6月下旬から大日本聯合青年団に勤務し従事するようになるが、後に1936年2月5日からはアチックミュージアムにも出勤するようになる(『アチックマンスリー』第8号, 1936年, 31ページより)。また、早稲田大学文学部国文学科を卒業したのちに1931年4月からアチックミュージアムの研究員となった村上清文は、新潟県の三面村で山村生活について長期滞在調査を行った後、1935年9月2日から出勤している(『アチックマンスリー』第3号, 1935年, 11ページより)

(3) この表については、民家研究会発行の『民家』、『建築世界』第29巻第2号(1935年)、蔵田周忠『民家帖』(蔵田1955)をもとに作成した。

(4) 『民家』第2巻第1号(1938年)の「消息」欄による。

(5) 皇紀二千六百年記念日本民族博物館については、2002年に横浜市歴史博物館で開催された渋沢敬三をテーマとした特別展「くらしを集める くらしを探る 屋根裏の博物館 Attic Museum—実業家渋沢敬三が育てた民の学問」で取り上げられ、渋沢史料館や工学院大学図書館今和次郎コレクションが所蔵している関連資料が展示された。展示された渋沢史料館所蔵の「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立建議案」と「日本民族博物館屋外部設計俯瞰図」、および工学院大学図書館今和次郎コレクション所蔵の「日本民族博物館野外部俯瞰図」は特別展の図録である『屋根裏の博物館—実業家渋沢敬三が育てた民の学問』に掲載されている(横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編2002)。また特別展を企画した刈田均は論文「日本民族博物館の設立に向けた動きとその経過について」において、渋沢史料館に所蔵されている「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立建議案」について紹介するとともに考察している(刈田2003)。刈田均の研究により、これまで宮本馨太郎や宮本常一といった渋沢敬三の弟子によって断片的に言及されるだけであった博物館の具体的な構想と設立の経緯が明らかになった。また2008年には、アチックミュージアムの同人であり、敷地の提供を申し出た高橋文太郎の側から記述した『高橋文太郎の真実と民族学博物館—埋もれた国立民族学博物館前史』が、西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会によってまとめられている

(西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会編 2008)。この他に資料としては国立公文書館に所蔵されている「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立趣意書」が存在する。

(6) 注(4)と同じ。

参考文献・引用文献

大川三雄

2009「生き続ける建築11 蔵田周忠」『INAX REPORT』177.

金子淳

2001『博物館の政治学』東京：青弓社。

刈田均

2003「日本民族博物館の設立に向けた動きとその経過について」『横浜市歴史博物館紀要』7：53-69.

加藤幸治

2011『郷土玩具の新解釈—無意識の“郷愁”はなぜ生まれたか』東京：社会評論社。

館史編纂委員会・編纂作業委員会編

1991『財団法人日本青年館七十年史』東京：日本青年館。

蔵田周忠

1933『近代的角度』東京：信友堂書店。

1934a『日本民家の模型製作に就て』東京：大日本聯合青年団郷土資料陳列所

1934b「montage」『国際建築』10(7)。

1935「三つの民家模型に就いて」『建築世界』29(2)。

1940『陸屋根—建築工芸小論隨筆』東京：相模書房。

1942「住文化と家具」『月刊工藝』4(12)。

1955『民家帖』東京：古今書院

1957『塔のある風景』東京：彰国社

祐成保志

2008『〈住宅〉の歴史社会学—日常生活をめぐる啓蒙・動員・産業化』東京：新曜社

竹内芳太郎

1978『年輪の記—ある建築家の自画像』東京：相模書房

西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会編

2008『高橋文太郎の真実と民族学博物館—埋もれた国立民族学博物館前史』東京：萩原企画

藤田治彦・川島智生・石川祐一・濱田琢司・猪谷聡

2010『民芸運動と建築』東京：淡交社

藤森照信

2009「建築保存の意義」鈴木博之+東京大学建築学科編『近代建築論講義』東京：東京大学出版会

古川隆久

1998『皇紀・万博・オリンピック—皇室ブランドと経済発展』東京：中央公論社。

宮本常一

1979『民具学の提唱』東京：未来社。

村松貞次郎

2005『日本建築家山脈』東京：鹿島出版会.

森仁史

2008『結成80周年 型而工房展——所蔵品による企画
展示』千葉：松戸市文化振興財団.

山野英嗣編

2009『コレクション・モダン都市文化 第44巻 デザ
インとバウハウス』東京：ゆまに書房.

横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編

2002『屋根裏の博物館——実業家渋沢敬三が育てた民の
学問』神奈川：横浜市歴史博物館.